

開催地名	京都府 八幡市
開催日時	令和7年2月15日(土)13:00～15:00
開催場所	八幡市文化センター4階小ホール
語り部	山田 修生(宮城県仙台市)
参加者	八幡市民等 計166名
開催経緯	本市では、自主防災組織の高齢化が顕著であり、後進の育成が進んでいないことや、近年市内で大規模な災害が発生していないため、市民一人ひとりが被災するイメージを持ちづらいことが課題である。そのため、防災講演会を開催し、語り部の方に災害の体験談を踏まえて、災害の教訓や備え等についてお話いただき、市民の防災意識の向上を図っていきたい。
内容	(1) はじめに 自己紹介 講演者は、東日本大震災において自宅が被災し、自らも被災者でありながら、地域住民の避難誘導や安否確認、避難所の開設・運営、支援物資の確保・配布などの調整を行った。また、被災者生活再建支援員としての活動も実施した。 防災・減災の活動に取り組み始めたのは、昭和53年に発生した宮城沖地震がきっかけであり、それ以降46年にわたり、地震・風水害・噴火などの自然災害に対応するための活動を続けている。さらに、令和6年1月1日に発生した能登半島地震以前にも、全国各地で防災講演会を実施し、六水町や富山市などで防災セミナーを開催。震災災害やバックビルディング現象(連続した豪雨による災害)の対応・対策について、情報共有を行ってきた。 (2) 自然災害の怖さ 1.南海トラフ地震 南海トラフ地震は、四国から静岡にかけての広範囲で発生すると予測されている。昭和19年(1944年)と昭和21年(1946年)に発生した地震は、南海トラフの一部が割れた状態で起こったものであり、完全な規模での地震は未だ発生していない。 2.宮城沖地震(昭和53年) この地震では、小学生が倒壊したブロック塀の下敷きになり犠牲となった。これを契機に、国は自然災害への対策を強化し、各地で自主防災組織が立ち上がる動きが加速した。現在では、全国で約1400の自主防災組織が結成されている。 3.能登半島地震 最大震度7を記録し、日本中に揺れをもたらした。特徴的なのは、地下水がマグマの熱によって上昇し、地震を引き起こしたという点である。 4.東日本大震災 東日本大震災は、「千年に一度の地震」とも言われる規模で発生した。同様の地震は、約1100年前の貞観地震にも記録されている。世界最大級の地震はインドネシアのスマトラ島沖地震(M9.1)だが、東日本大震災(M9.0)は、それに次ぐ規模であった。地震により、約10万平方キロの地盤が沈下し、その面積は京都府21個分、首都圏の7県以上に相当する。 東日本大震災では、3月9日午前M8.3の地震が発生し、翌10日にもM6.8の地震が発生していた。さらに1カ月後の4月7日にはM7.2の余震が起これ、すでに家屋や崖が脆くなっていた地域でさらなる被害をもたらした。日本では、南海トラフ地震に関する臨時情報が昨年発表されており、今後10年間で約1万4000回の余震が発生すると予測されている。 (3) 東日本大震災の日のこと 1. 体験談(山田さんのケース) 震災当日は、自宅におり、最初の震度3～4の揺れでは特に危機感を感じなかった。しかし、その後の揺れは突然強まり、縦揺れ・横揺れ・斜め揺れが同時に発生し、立っていることもできないほどだった。冷蔵庫は倒れ、中の物が飛び出し、テレビも吹き飛ばされた。何度も続く揺れに、「このまま死ぬかもしれない」と強い恐怖を感じたという。 震災の講演を続けてきた立場でありながら、実際の地震では何もできず、「何のための防災活動だったのか」と自責の念に駆られた。また、津波のレクチャーをしていた地域がすべて津波に襲われた事実にも、無力感を覚えたという。 2. 地震発生時のマンション住民の避難誘導 自主防災組織や自治会では、毎年、住民と相談しながら避難訓練を実施していた。しかし、実際の災害は、深夜や悪天候の中で発生する可能性があり、その際にどのように命を守るかが重要となる。震災当日、80世帯が住むマンションが全壊したが、当時の自主防災組織の男性はほとんどが仕事で不在だった。そのため、避難誘導に尽力したのは、副支部のメンバーや民生委員などの女性役員であった。こうした経験からも、防災活動において女性の役割がいかに重要であるかが分かる。

避難誘導の際、住民たちは動揺し、何を持ち出せばいいのか分からない状況だった。ハンドマイクを使い、「懐中電灯と携帯電話を持って1階の広場に集合するように」と指示を出し、大声で避難を促した。こうした場面では、指示を出せるリーダーの存在が極めて重要である。

(4) 津波の脅威と対応

新築の一軒家が津波によって50mも流されるなど、津波の破壊力は想像を絶するものであった。津波が発生した際には、以下のような対応を取ることが推奨される。

- ・夜間でもすぐに避難できるよう、外出用の服を着て就寝する
- ・枕元に靴を置き、ガラス片などから足を守る
- ・非常用持ち出し品を常備し、すぐに持ち出せるようにする
- ・室内に安全な避難スペースを確保し、家具の転倒防止を行う

(5) 避難所での課題と対応策

- ・避難所が被災して利用できない場合
→ 事前に代替の避難先を想定しておく
- ・車中泊をする避難者への支援が不足
→ 食料配布が避難所中心であり、車中泊の人への配慮が不足していた
- ・トイレの問題
→ プールの水を活用するなど、柔軟な対応が求められる
- ・自主防災組織の活動
→ 学生が積極的にトイレ設置や備品管理を担当する場面も見られた
- ・TKB48の重要性(トイレ・キッチン・ベッド)
→ これらを48時間以内に確保することが、避難生活の質を左右する

(6) まとめ

災害時には、すべての住民が被災者となる。まずは「自分と家族の命を守ること」が最優先であり、そのための備えが不可欠である。また、特に高齢者や女性がどこまで自主的に動けるのかを把握し、支援が必要な場合には、事前の準備を行っておくことが重要である。防災の知識や経験は決して無駄にはならず、身につけたことは必ず活かされる。今後もスキルアップを続け、訓練を通じて地域防災力を高めていくことが求められる。



開催地より

実災害を体験している語り部の体験談から改めて、避難を継続すること大切さについて痛感した。此度の講話を今後の防災活動や出前講座に活かしていきたいと思う。